法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-21

# Le journal intime dans les cours de civilisation

Omiya, Shiho / 近江屋, 志穂

(出版者 / Publisher)
法政大学言語・文化センター
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
言語と文化 / 言語と文化
(巻 / Volume)
10 別冊
(開始ページ / Start Page)
77
(終了ページ / End Page)
105
(発行年 / Year)
2013-02
(URL)
https://doi.org/10.15002/00008528

Hosei University Repository



# 異文化教育と日記

近江屋志穂

## はじめに

本発表の目的は、大学の授業に見られる問題点の一つに解決策を見出すことである。問題点とは、学生に課すレポートや授業コメントが、しばしば個人的エピソードや感想など、主観的な記述に満ちているということである。

その原因の一つは、日本の国語教育のあり方に求められよう。小・中・高を通じて、作文の技術を習ったことのある学生はほとんどいないと思われる。すなわちどのような作文が上手な作文であるのか、構文や文章としてはあまり説明を受けなかったに違いない。従って、高校を卒業したばかりの大学生が、レポートのような文章を適切に書くことができないのは当然である。これは日本の学生一般に共通する問題ではなかろうか。

とは言え、本発表のテーマは「レポートや論文の書き方」というわけではなく、より客観的な文章が書けるようになるための指導方法である。

教材は、フランスの作家の日記である。日記は日本人の学生にとって身近な文学ジャンルであるというのがその理由の一つである。しかし一般に日記とは、まさに個人的なエピソードや感想を書く場である。実際フランスの作家の日記にも、内面を中心に記述したテクストが数多く見られる。だが一方で、「自分自身」を排除した断章も比較的多く書かれている。そのような、これまで学生が親しんできた日記とは違うタイプの日記をあえて取り上げることにより、「客観的な文章」とは何かを実感させるのである。

ここで対象とするのはフランスの文化や社会をテーマとした授業であり、受講の条件としてフランス語の既習・未習を問わない。従ってフランス語の日記テクストは日本語に訳したものを配布する。それをモデルとして学習者にあらためて日記を書かせることで、主観的な文章と客観的な文章との違いを意識さ

Hosei University Repository



せることが指導の狙いである。それは文章作成力の向上だけでなく、一つの異文化体験にもつながるであろう。

本発表は、日記の書き方に関する理論と作家の日記テクストの紹介、の二部に分かれている。第一部では「本当のこと」を書く意味に焦点を当て、日記を課題に出す際の指導方法を論じる。第二部では、フランスの日記テクストの中からモデルとすべき日記の例を示す。

## 第一部　理論

### 1. ありのままに作文する

学校の教師はしばしば、日記には「本当のこと」を書かなければならないと生徒に言う。「本当のこと」とは何であろうか。

ジャン・ルッセは、体験から時間を経て書かれたテクストは限りなく自伝に近づくとするフィリップ・ルジュンヌに従えば、体験した事柄を、その体験のままに書いたテクストが日記であるという。確かに間隔が空くことで、体験のすぐ後でなければ書かなかったような事柄が損なわれ、それによって日記の特性が失われてしまう。しかし厳密な意味で「体験したときの感覚のままに」記述することは不可能である。そこでジャン・ルッセは、「体験とそれを記すまでの時間が極めて短いテクスト[1]」と定義し直す。

他方、そのような書き方をすると、文章としての完成度が低くなるのではないかという懸念が生じる。シルビアンヌ・アガサンスキーは、ドラクロワの日記を分析し、「体験のまま、その瞬間において」書くことと、「構成され、完成されたテクスト」を書くこととを対置させている。

> 一つのテーマ、アイディア、または印象を放っておいてしまうと、すべてがだめになる。だから彼（ドラクロワ）にとっては、下書き、あるいは支離滅裂な完結していない、ただしありのままに書かれた文章の方が、人為的に構成された書物よりも価値があった。しかし、一方ではモンテーニュを高く評価していたにもかかわらず、日々書かれた断続的な文章を本当の作品とは見なしていなかった。心の底では、基準と好みにおいて、伝統的であり続けた。彼は一瞬の、そのときどきの状況において得た着想の力と、もっと建築的なもの、構成の作業を必要とする創作の力との矛盾か

Hosei University Repository



ら、決して抜け出すことはなかった[2]。

しかしフィリップ・ルジュンヌによると、「瞬間のインスピレーション」と「しっかりした構成」を両立させることは可能である。ただ、そのためには、書きながら修正するという技術が必要となる。

> これほど強く厳しい制約に従わなければならない芸術は日記の他にない。そこではふつう行われる作業がすべて禁じられている。すなわち日記の書き手は後から構成し直すことも修正することもできない。最初から適切なことを言わなければならないのだ[3]。

しかも、他人が読んでも分からない暗黙の了解や、他人を退屈させる繰り返しを避けなければならならない。それは緊張をはらむ作業である。一般に日記は簡単に書くことができるテクストであると思われているが、実際はその正反対なのである。

いずれにせよ、学生にはまず次のような指示を与える。「本当のことを書く」こと。それは「その日の感覚を覚えているうちに、すなわちその日のうちに、体験したことをその感覚のままに書く」ということである。同時に「完成された」テクストを書くよう伝える。

## 2. 現実を「切り取る」

では、「本当のこと」を書くとは、その日一日に見たこと、聞いたこと、体験したことを、時間を追って、全てありのままに書き記すということであろうか。もちろんそうではない。第一、一日の出来事をすべて記すなど不可能である。

> 「親愛なる日記よ、君には全て言おう。」そのようなことは幻想である。日記は魔法使いの鏡とは程遠い。むしろふるいである。日記の価値は、まさにその選択性と非連続性にある。一日の中には数多くの側面があり得るが、日記はその中から一つか二つの、問題のある事柄しか捉えない。暗黙の了解で、うまくいっていることや当たり前のことには触れることがない[4]。

Hosei University Repository



誰しも、一日の中で目にしたこと、聞いたこと、考えたことの中から、記憶にとどめるに値することを選定しなければならない。それは「現実を切り取る能力」を必要とする。

この点を具体的に説明する日記の例として、明治33年10月から雑誌『ほとゝぎす』が募集した投稿日記、「週間日記」を想起できよう。応募の条件に、「プライベートや仕事でその日に起こったこと、考えたこと、天候などを記すこと」そして「事実を書くこと、事実ではないことをまるで事実のように書いてはいけないこと」、とある[5]。

しかし事実をありのままに述べるだけでは不十分である。審査員の一人であった正岡子規は、『ほとゝぎす』に掲載されるためには「面白いことを捉えて書くことが肝心」であると述べている[6]。

### 3. 日一題

確かにいくら本当のことでも、一日の出来事が時間を追って書かれただけの他人の日記はつまらないことが多い。そもそも文章教育のための日記であるから、単なる一日の記録では不十分である。

優れた面白い日記を書くには、「切り取った現実」をうまく展開させなければならない。

ところで日本の学校教育を受けた多くの学生たちは、小学校の頃から課題で日記を書いてきた。彼らは学校でどのような指導を受けてきたのであろうか。日記指導の一例として、小学校教員で『だれにでもできる日記指導』(1993)の著者、斎藤民部氏の記述を参考にすると、同氏は、「一日の生活の中で心に残っていることを一つ選んで作文する」よう指導している。

あるいはまた、時代が離れるものの、明治時代の高等小学校の日記指導論を取り上げてみる。そこで示されているのは、ただ漫然と日記を書くのではなく、「日一題」という方法で書くことが「綴り方」の修養になるという考えである[7]。岡利道氏によると、初等教育の実践家、芦田恵之助は、「材料」を固定し、一まとまりの日記文を毎日書かせること、そして日記全体としての統一性とテーマ性を指向させることを目指していたという[8]。

両者に共通するのは、単に自分だけが分かれば良い生活の記録ではない、他人が読むに値する日記を書くためには、一日の出来事をそのまま述べるのではなく、一つのテーマに絞り、そのテーマについて書くべきであると主張してい

Hosei University Repository



る点である。それは日々完成されたテクストを書かなければならないことをも意味する。

確かにこのような方法で日記を書き続ければ、構成力や文章力を向上させることは可能であろう。しかし斎藤民部氏が紹介する子供たちの日記を読む限り、その指導法によって要求されているのは、面白い個人的なエピソードである。ところが我々は、まさに「個人」や「主観」を排除した文章教育を行うことを目的としている。そこで次に述べるように、究極的には「事実のみ書く」よう指示しなければならない。

### 4. 事実を書く

ここでハンガリー出身のフランコフォン作家として知られるアゴタ・クリストフの『悪童日記』を引用する。引用箇所は「ぼくらの学習」という章の中の一節であり、小学生くらいの双子の兄弟が作文の練習をする場面である。兄弟は別々のテーマを与え合い、それぞれのテーマについて二時間で書く。その後お互いの作文を交換し、綴りの間違いを直し合い、「良」か「不可」という評価をつけ合う。その評価の基準ついて次のように書かれている。

> 「良」か「不可」を判定する基準として、ぼくらには、きわめて単純なルールがある。作文の内容は真実でなければならない、というルールだ。ぼくらが記述するのは、あるがままの事象、ぼくらが見たこと、ぼくらが聞いたこと、ぼくらが実行したこと、でなければならない。
>
> たとえば、「おばあちゃんは魔女に似ている」と書くことは禁じられている。しかし、「おばあちゃんは「魔女」と呼ばれている」と書くことは許されている。
>
> 「〈小さな町〉は美しい」と書くことは禁じられている。なぜなら、〈小さな町〉は、ぼくらの眼には美しく映り、それでいて他の誰かの眼には醜く映るかも知れないから。
>
> 同じように、もしぼくらが「従卒は親切だ」と書けば、それは一個の真実ではない。というのは、もしかすると従卒に、ぼくらの知らない意地悪な面があるのかも知れないからだ。だから、ぼくらは単に「従卒はぼくらに毛布をくれる」と書く。
>
> ぼくらは、「ぼくらはクルミの実をたくさん食べる」とは書くだろうが、

Hosei University Repository



「ぼくらはクルミの実が好きだ」とは書くまい。「好き」という語は精確さと客観性に欠けていて、確かな語ではないからだ。「クルミの実が好きだ」という場合と、「お母さんが好きだ」という場合では、「好き」の意味が異なる。前者の句では、口の中にひろがる美味しさを「好き」と言っているのに対し、後者の句では、「好き」はひとつの感情を指している。

感情を定義する言葉は、非常に漠然としている。その種の言葉の使用は避け、物象や人間や自分自身の描写、つまり事実の忠実な描写だけにとどめたほうがよい[9]。

この下りは、木下是雄の『レポートの組み立て方』(1990)の中の、「事実と意見の違い」に関する一節を思わせる。木下によると、欧米では、この二つを区別する訓練が「言語技術教育」の礎石とされている。木下の主張を要約すれば、「事実」とは証拠をあげて裏づけすることのできるものである。そして事実の記述は真か偽しかありえない。他方、「意見」とは何事かについて人が下す判断である。他の人はその判断に同意するかもしれないし、同意しないかもしれない。意見に対する評価は原則として多価である。つまりある意見に対して、「そのとおり」「とんでもない」「ある面ではそうだ」等、人によって評価が異なる。木下は、日本の国語教育でも、「事実」と「意見」とを異質のものとして見分ける感覚を子供の時から培うことが重要だと主張する。

ところでこれは先ほどの引用箇所において示される、「良」、「不可」の判定基準と対応している。すなわち「事実」が「良」、根拠のない主観的な「意見」が「不可」である。もちろんこの作品は国語の教科書ではなく、教育目的で書かれたテクストでもない。それだけに、主張の説得力が増すのである。ごく当たり前の事柄として、ハンガリーあるいはヨーロッパ全体、そしてアメリカの子供たちは、こうしたことを学んでいるという事実が強調される。

また、木下は、「悲惨な」「胸がはり裂けるような」といった主観的な修飾語を使わなくとも、「事実の忠実な描写」によって心情も強く伝わると述べている。この点も『悪童日記』の著者が狙いとしたことではないかと思われる。実際、全体を通してこうした言葉を一切用いずに、死、戦争、別れ、子供の性といった重いテーマを扱っており、その衝撃は読者に十分伝わってくる。

この引用部分が本発表のテーマとどのように関係するのか、それについては邦訳のタイトルに注目したい。そこには「日記」という言葉が用いられてお

Hosei University Repository



り、これは示唆的である。この作品は日記ではなく小説であり、日記形式で書かれているわけでもないからだ。次のように、少なくとも日本人の翻訳者（堀茂樹氏）は、ある意味でこのテクストを日記と見なしているのである。

> さて、さきほど訳者は、「悪童日記」を「異形の小説」と言った。少年の日記帳ないし作文帳の体裁をとり、全篇が一種の寸劇の連続から成り立っているような小説が他にあろうとも思えないからである[10]。

翻訳者は、この作品を、いわば少年たちが日々日記帳の中に事実を綴っていく中で完成したテクストと捉えている[11]。

文章教育に話を戻せば、この少年たちのように「事実」のみを日記に書き続けることが、「主観」から脱した文章を書く訓練になる。ある一つのテーマにしぼって「事実」をまとめるのである。実際にその方針を徹底させるのは困難にしても、このような書き方を目指すように指導すれば良いのではなかろうか。

## II. フランスの作家の日記テクスト

次に、少なくともテクストの表面には書き手の内面が表れない日記テクストの具体例を、フランスの現代作家の日記から引用する。それらのテクストを便宜的に六つのカテゴリーに分類した[12]。尚、これらはすべて一日分の日記であり、部分的な引用ではない。

### 1）匿名の人々の観察

実は事実だけが記された日記というものが存在する。1996年から98年にかけて数名によって書かれた『集団の日記』である。第一巻の序文に、このテクストの執筆条件が記されている。

> 執筆者は、パリあるいはその郊外の公共の場所（通り、カフェ、駅、映画館、地下鉄など）で展開される場面を記述すること。会話はあってもなくてもよい。創作してはならない。本当に見た場面や風景を描写しなければならない。語りの中で正当化されるのでない限り、記述の対象となるの

Hosei University Repository



は匿名の人々である。一人称代名詞「私」を用いずに、厳密に描写すること。日付、時間、場所を記録すること。三行から三枚の間で書くこと。

まさに書き手の個人的なエピソードで満ちた日記とは異なるタイプの日記であり、「見たこと」「聞いたこと」という「事実」のみが記された日記である。そのような意味で、先に引用したアゴタ・クリストフの小説中の「良い作文」に近い。『集団の日記』の一つの断章を引用しよう。

1994年5月12日木曜日，20時30分
モンパルナス大通り
美しい夕方、祝日のためほぼ無人の大通りに、太陽が沈む。一人の若者がさびついた古い自転車に近づき、チェーンを取り外そうとしている。一人の男が近くのベンチに座ってビールをがぶ飲みしている。彼は帽子をかぶり、ひげがあり、汚い服を着ている。
－お前の自転車か？
－そりゃそうだよ。
－この自転車を見かけるたびに動くのかどうか疑問に思うんだよ。
－動くよ。オンボロだけど走るよ。
－走る？
－ああ。
－けど、やっぱりこがなきゃならないんだろう？
－やっぱり、そうだよ[13]。

同様のコンセプトに基づいて書かれた作家の日記として、アニー・エルノーの『戸外の日記』(1993) と『外の世界の生活』(2000) を挙げることができる。作者は『戸外の日記』の序文において、「もう二度と会うこともない匿名の人々の演じる場面、話す言葉、その仕草、書かれるや否や消される壁の落書きを記述したかった」と述べている。同時にテクストを書くもととなった自分の感情を、最大限排除することに努めたという。一例として、地下鉄の中の見知らぬ人々の会話を記述した断章を引用する。

パリへ向かう朝七時の満員電車の中で、人びとは話さないか、あるいは

Hosei University Repository



ボソボソと、ゆっくりした声でほんの少しだけ話す。ひとりの女性が眠そうな口調で、彼女に向かい合っているもう一人の女性に話しかけている。飼っている魚が水槽の中で死んでいるのを見つけたのだという。「私、水槽の中をバチャバチャやってみたんだけど動かないのよ。その魚が水面に浮かび上がってくるのを見た時、私、言ったの。'いいわ、分かったわ'って」。少しのち、彼女は同じ事件のことをまた話題にし、繰り返す。'私、言ったの。"いいわ、分かったわ"って」。彼女が話している間、窓際にいる別の女性が聞き耳を立て、好奇の眼差しで彼女を見つめていた。車内の明かりは黄色く、人びとはそれぞれの外套に包まれて息苦しさを感じていた。列車の窓が水蒸気ですっかり曇っていた[14]。

同様に、ミシェル・トゥルニエの日記、《*Journal extime*》(2002) も挙げられよう。彼はタイトルに、《journal intime》(日記) の形容詞《intime》(内面の) の反対を表す《extime》(外の) という造語をつけ、実際に外の世界の観察を中心に記している。この中に次のような書き出しで始まる断章がある。「私はある小学校の子供たちに言った。毎日大きなノートに数行の文章を書きなさい。自分の気持ちではなく、外の世界のこと、すなわち人々や動物や事物についての日記を書きなさい、と[15]。」彼の日記の中から他人のしぐさが記述された断章を一つ引用しよう。

家族のちょっとした光景。若いパパが娘—3歳－を左腕に抱いている。ママがすぐ近くを通ったので、右腕で彼女を抱き寄せる。女の子の反応は次の通り。足を踏みならし、母親を足でけってひたすら押しやろうとする。パパを自分一人のものにしたいのだ[16]。

両作家の日記とも、全体を通して完全に内面を排除しているとは言えないが、書き手の心の中ではなく他人が織りなす光景や社会で起こった出来事に注目するという執筆の方針を貫いている。

### 2) 社会

ここには社会問題、フランスや世界で起きた事件、新聞の三面記事の記録などが分類される。例えば次のような断章である。

Hosei University Repository



3月7日　木曜日

再び性的暴力と同意の問題が持ち上がる：フランスでは強制結婚の数がまだ多すぎる。とりわけアフリカ（マリやセネガル）、マグレブやトルコの家族の若い娘たちである。（この問題についてはコリーヌ・セロー監督の『カオス』を見るべきだ。）国民教育省はこの問題に関係する、あるいは関係するおそれのある若い女子生徒たちを守るため、効果的に行動を起こした。若い娘たちが必ずしも知っているとは限らないことをもう一度言おう。フランスにおいては力によって強要されるあらゆる性的な関係は強姦、すなわち犯罪である、ということを。この国の法では、夫婦の同意を前提としない婚姻は存在しない。この点については長い歴史がある。ローマ法と教会法（既に協議離婚という概念を持っていた）の時代まで遡る。同意とは美しい言葉である。そして良いことだ。

アイルランドにおいて、反人工妊娠中絶法を強化する案が提案され、国民投票にかけられた。つい最近辛うじて（50.42%の票によって）拒否された。だが中絶禁止は存続する。だからアイルランドの女性たちは必要な場合は他の国に行って中絶をするのだ。これは解決になるか。否である[17]。

3)「格言的な言説」

フランスの日記には、ジュール・ルナールやゴンクール兄弟から現代作家の日記まで、ラ・ロシュフーコーの『箴言』を思わせる文章が数多く見られる。フローベールの『紋切型辞典』風の文章や一種の「ポルトレ」とも言える定義形式の文章もここに分類した。以下に例を示す。

機械は生きた存在である。そのように言えるのは、それが我々に似せて作られているからではなく、我々と同じくらい、ほとんど自立していないからである[18]。

日記のセラピー。苦しみを分析することにより、苦しむことに早く打ち克つ[19]。

7月14日

深刻なものにせよ取るに足らないものにせよ、しつこい悩みの種が、

Hosei University Repository



「一つの釘が他の釘を追い出す」式に次々と起こる心配症の人[20]。

4) 人物描写（ポルトレ）

また、ラ・ブリュイエールの『人さまざま』を想起させるような「ポルトレ」（人物描写）も、日記の中でしばしば目にする。以下はレジーヌ・デフォルジュによるフランソワーズ・ジルーの「ポルトレ」である。

> 1月20日月曜日。パリ。「私は適切な人物ではない。」こう自分のことを言っていた女性は、今日、大部分の日刊紙のトップを飾っている。フランソワーズ・ジルーに敬意を表するのはあまりに当然のことだ。50年間手厳しいジャーナリストであり、時事と自分の仕事に対して常に情熱をもっていた。彼女は決して打ち消されることのない大いなる貪欲さでもって仕事をこなしていた。だが時間が経てば経つほど、下品で無教養であると彼女が評した現代と自分が調和していないと思うようになった。そして時間が経てば経つほど、彼女は老いを嫌うようになった。屈辱感をもって老いに耐え、我々の時代に入手できる手段で老いと闘っていた。フェミナ賞審査委員会に、穏やかな声で自分が選んだ人物を伝え、しばしば他の人たちの同意を得ることに成功した。彼女については、強くてもろい、勤勉でおしゃれな、そして厳しい男社会で受け入れられ、認められるために、必死の努力を傾けていた女性というイメージを持ち続けるだろう。一方、誰も彼女の辛辣な精神から免れ得なかった。政治家にしても、知識人や作家にしても[21]。

5) 天候の記述

フランスの日記においては、天候は単に日々記録される項目ではなく、次のように思索や分析のテーマや描写の対象となり得る。

> 数週間大雨が降り止まなかったが、ある朝休止。すぐさま通りで人の声が聞こえた。まるで復活のように。人は傘をさしているとき、少し休んで近くの人と言葉を交わす時間を取ろうとしない。急ぎ、逃げ、避難場所である家にできるだけ早く戻る。日常の気象学と音との相関関係。重要な意味をもつ[22]。

Hosei University Repository



### 6) 風景描写

日記の中の風景描写には、まとまった長さの断章だけでなく、一瞬の光景を記述した短い断章も見出される。一人称主語が表れない後者の例として、「遠くに、教会の小さな鐘楼[23]」などが挙げられる。

## IV. 終わりに

第二部で紹介したテクストは、一般に理解されている日記とは少し異なる特徴をもつ。ここではあえて作者の「内面」が記述されていない断章を選んだ。それによってこれこそがフランスの日記の特徴であると主張するのではない。ただ、日本の作家の日記に比べ、こうした断章が多く見られると言うことはできる。

日記は学生が馴染んでいる文学ジャンルであるだけに、このような文章と、今まで親しんできた日記の文章との違いを彼らは強く意識するのではないかと思う。

一年間の授業では、前期と後期で「日記を読む」、「日記を書く」、の二つのテーマを扱う。「日記を読む」では日記テクストについて解説し、日記を切り口としてフランスの社会やフランスの文学に学生を親しませる。例えばシルビアンヌ・アガサンスキーの断章では、フランスのフェミニズム運動について、箴言風の文章では17世紀のモラリスト文学について説明する。

本発表では「日記を書く」の方を取り上げた。内面に集中しない文章を書く練習として、あえて日記を手段とした指導方法を考えるというのが発表の趣旨である。

《注》

(1) ジャン・ルーセ、『内面の読者：バルザックから日記まで』、ジョゼ・コルティ社、1986年、p. 159.
(2) シルビアンヌ・アガサンスキー、『中断された日記－2002年1月24日～5月25日』、スイユ社、2002年、pp. 63-64.
(3) フィリップ・ルジュンヌ、『生のしるし』、スイユ社、2005年、p. 84.
(4) 同上、p. 78.
(5) 高橋修、「作文教育のディスクール－＜日常＞の発見と写生文」、『メディア・表

Hosei University Repository



象・イデオロギー－明治三十年代の文化研究」、小森陽一・紅野謙介・高橋修編、小沢書店、1997年、p. 273.

（6） 同上。

（7） 岡利道、「芦田恵之助の日記文指導論」、『文教国文学』、n° 48、2003年、p. 45.

（8） 同上、p. 44.

（9） アゴタ・クリストフ、『悪童日記』、堀茂樹訳、早川書房、1991年、pp. 35-37.

（10） 堀茂樹「異形の小説－あとがきにかえて－」、同書、p. 238.

（11） あるいは、第3節で述べたような、「日一題」式の日記テクストとも言えるかもしれない。

（12） いずれも「自分」を排除して「現実を面白く切り取る」方法の例を示している。

（13） 『集団の日記』、アソシアシオン・ヴィネーグル社、1996－1998年、p. 22.

（14） アニー・エルノー、『戸外の日記』、堀茂樹訳、早川書房、pp. 91-92.

（15） ミシェル・トゥルニエ、*Journal extime*、ガリマール社、2002年、p. 108.

（16） 同上、p. 35.

（17） シルビアンヌ・アガサンスキー、前掲書、pp. 59-60.

（18） モーリス＝ジョルジュ・ダンテック、『活動の舞台－哲学的で論争的な日記』、ガリマール社、2000年、p. 46.

（19） オリビエ・バルバラン、『麻痺した時間－不正確な日記（1986～1998）』、シャン・ヴァロン社、1999年、p. 21.

（20） ミシェル・レイリス、『日記 1922～1989』、ガリマール社、1992年、p. 804.

（21） レジーヌ・デフォルジュ、『今世紀は三年目だった、2003年の日記』、スイユ社、2004年、p. 26.

（22） ルイ・カラフェルト、『閉じられた庭、手帖 XVI　1994年』、ガリマール・ラルパントゥール社、2010年、p. 30.

（23） 同上、p. 24.

（法政大学法学部教授）